岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

# 薬害防止のための毛髪による薬歴・疾病治療歴診断手法の確立とその臨床応用



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2008-03-12<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 植松, 俊彦<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12099/405 |

## はしがき

疾病の治療のために投与された薬物によって有害作用が発現し身体への重篤な障害を惹起したり患者を死に至らしめることは、本来あってはならないことである。特に「薬害」として常にマスコミ等により喧伝される現代にあっては、薬物治療に携わる者ha常に薬害の予防と有害作用発現時の迅速な処置を心掛けている必要がある。しかし、薬物の作用は患者一人一人で異なっており、その個人差を生じる原因として薬理作用の個人差と薬物体内動態の個人差の両方を常に評価しながら薬物の投与を行う必要がある。さらに薬理作用と体内動態は患者の病態によっても異なり、且つ変動している。また、現代医療においては薬物は単独で使用されることは殆どなく、"かけ持ち受診"などの問題も含めて、併用される場合が多く、それ故に薬物相互作用による有害作用の発現が危惧されている。しかも抗ウィルス薬ソリブジンと抗癌薬5-フルオロウラシルとの薬物相互作用による「薬害」事件に見られるように、癌の告知問題とも絡んで、患者自身が抗癌薬を使用されていることを認識していない場合もあり得るのである。

以上の点を総合すると、薬害の発現を防ぎながら投薬を行うための前提として、患者の服薬歴や服薬コンプライアンス、さらには腎機能など患者の病態およびその時間経過による変動を、客観的に評価することが必要となる。研究代表者らは以前より毛髪という組織が過去の服薬歴を記録し続けている、いわば「服薬歴の記録テープ」であることを示してきた。それら業績を踏まえて本研究においては米国における毛髪分析の権威であるユタ大学 Center for Human Toxicology の Douglas E. Rollins 教授を共同研究者として毛髪分析によって患者服薬歴・疾病治療歴を全て知ってしまい薬害防止のためにその情報を役立てる臨床応用性を探ることを目的として検討を行った。

## 研 究 組 織


研究代表者：植 松　俊 彦　（岐阜大学医学部薬理）
研究分担者：小 澤　　修　（岐阜大学医学部薬理）
研究分担者：丹 羽　雅 之　（岐阜大学医学部薬理）
研究分担者：松 野　浩 之　（岐阜大学医学部薬理）
研究協力者：Douglas E. Rollins
（ユタ大学 Center for Human Toxicology）


## 研 究 経 費


| | |
|---|---|
| 平成10年度 | 3,200 千円 |
| 平成11年度 | 2,500 千円 |
| 計 | 5,700 千円 |